

# インターナショナル・アカウンティングへの再挑戦とアカウンティング・プロフェッション

藤沼 亜起

日本公認会計士協会

## 要 旨

経済のグローバル化が進展しているなかで、会計教育者を含む広義の意味でのわが国の会計プロフェッションの国際社会における位置付けやその影響力が、世界第二の経済国という国の経済力と比して十分でないことは、長年、会計士の世界組織である国際会計士連盟 (IFAC) や国際会計基準委員会 (IASB) の評議会の活動に関与してきた者として懸念されることでありました。

その中で、昨年SECとEU間でロードマップが締結されたことを受け、FASBとIASBは両会計基準のコンバージェンス推進に向けての合意書(MOU)を、本年(2006年)の2月に公表していることから、会計基準の統合化への流れは一層速まることが予想されます。

単一な会計基準への収斂作業は極めて難しい課題ですが、日本がこのプロセスに積極的に関与しそれなりの影響力を行使することは大変重要であり、そのためには当学会からの有形無形の協力が不可欠であると思います。

今回の学会発表では、一会計士として国際会計学会に期待することを、自らの非力を省みず、率直に述べております。残念ながら、発表内容を論文として整理しておりませんが、レジメの内容でその要旨が理解していただけたら幸甚に存じます。

## 1. はじめに

尊敬する平松一夫先生が会長を勤める国際会計研究学会に、パネリストとしてご招待いただき大変感激しております。

今回の公開シンポジウムのテーマ「インターナショナル・アカウンティングへの再挑戦」は大変刺激的で、学会でもこのようなテーマの取り上げ方をするのかと感心いたしました。私には、狭義のアカウンティング・プロフェッション（会計・監査実務の専門家）つまり会計士業界の代表として辛口のコメントが期待されていると理解し、会計における日本のプレゼンスを高めるという主旨から日頃考えていることを率直に述べる予定です。

## 2. 会計士業界は国際会計学会をどうみてきたのか

- 国際会計の重要性を認識し日本の会計のレベルアップに努力してきたか
- 積極的に意見の発出を国内外にしてきたか（インナーサークルでの議論が中心ではなかったか）
- 国際会議に出席し、日本での研究の成果や意見の発表を行ってきたか
- 外国の文献に論文を積極的に投稿してきたか
- 海外の会計学者との交友関係は十分か、留学体験を十分に生かしたか
- アカデミアと会計実務家の連携は十分であったか（他の学会と比較して）

## 3. 国際会計学会に対する期待

- 日本の資本市場の将来像に対するビジョンの確立
- グローバル経済の加速化と会計基準のグローバル化—コンバージェンスの促進は待たなし
- 経済界などに対する会計のオピニオン・リーダーに
- 国際的な活動ができるヒューマンリソースの確保と後継者教育の強化
- 大学及び大学院での会計教育の充実

## 4. 結び

- 公認会計士協会とのコラボレーション